

出版社は読者からの励ましが何より力になります

あけび書房社長久保則之氏に聞く

「うらわ宿」編集部は5月下旬、浦和区東岸町にお住まいで2014年度第30回梓会出版文化賞を受賞された出版社「あけび書房」の代表取締役社長久保則之氏にインタビューしました。設立から32年間、一貫して福祉、貧困、憲法をテーマに、これまで300冊近い本を出版しています。久保社長に、受賞の喜びやこれから出したい本、出版界の状況そして安倍政治への姿勢などについて縦横無尽に語っていただきました。

Q. 「梓会出版文化賞」受賞おめでとうございます。この賞について概要を教えてください。また今回の授賞理由、感想などお願いします。

A. 作品や著作者には芥川賞など数多くの賞がありますが、出版社に与えられる賞というのは殆どなく、この梓会出版文化賞が唯一と言っていいほどです。この賞は毎年1つの社に与えられ、今年で第30回となります。大手ではなく継続的に頑張っている中小出版社が対象になります。今回私共が受賞しました。『NHKが危ない!』『これでいいのか! 日本のメディア』『日本の奨学金はこれでいいのか!』『生活保護で生きちゃおう!』など「挑戦的で気骨ある出版活動」というのが選考理由です。上野千鶴子さんや斎藤美奈子さん、竹内薫さん等、素敵な審査員の方々から評価されたということで、大変嬉しく思っています。社団法人出版梓会というのは1948年にできた出版社の組織で、社会文化の向上に貢献するような出版活動を行うとされ、「梓会出版文化賞」もそうした目的で作られた賞です。

Q. これまでにも出版でほかに表彰されたことはあるのでしょうか?

25年位前、『高齢化社会は本当に危機か』という本で、共産党の「野呂栄太郎賞」を受けたことがあります。また10年位前にJCJ賞（日本ジャーナリスト協会賞）を受けたこともあります。

Q. 久保社長の経歴や、あけび書房の歩みを教えてくださいませんか。

A. 生まれは名古屋です。新幹線名古屋駅から見える駅のすぐ西側、当時は駅裏、闇市と言いましたが、そのごった返していたところで生まれ育ちました。大学は名古屋大工学部応用化学科だったのですが、卒業直前の4年生の12月に中退し、哲学をやりたくて当時島田豊先生がいた日本福祉大学に受験し直し、入学しました。四日市コンビナートの大手企業に就職をすることになっていたのですが、このまま公害をまき散らす企業に入っているのだろうかという疑問を感じ、学生運動真っ盛りの影響もあってもう一度考えてみたくなったんですね。親は勿論嘆きました。日本福祉大学で共同作業所など障がい者問題にかかわって福祉にも関心を持つようになりました。卒業後、上京し、機関紙協会本部の出版部門に約10年勤めました。その時に学んだことが独立して出版社を開く上で役立っていったと思います。

あけび書房を設立したのは、当時中曽根政権が進めていた福祉切り捨て路線に出版活動を通して反撃したかったためです。設立日も1983年2月1日で老人保険法が施行された日としました。この日はそれまで無料だった老人医療が有料となった日です。

Q. 最初の本は「いのちの山河～日本の青空Ⅱ～」の原作で有名になった『沢内村奮戦

記』でしたね。

A. そうです。国に抗して老人医療無料を続けた沢内村の本です。及川和男さんの『村長ありき』とともに映画の原作になりました。この本は現地の岩手県沢内村に何度も通って村長や病院長、保健婦さん達と一緒に作った本でもありましたので、思い出深いです。大澤監督の日本の青空シリーズで更に有名になりましたが、この本でスタートできたのは幸運でした。

Q. この本がもっとも売れたのですか。

『沢内村奮戦記』はよく売れましたが、最も売れたのは『福祉が人を殺すとき』という本です。題名は私がつけましたが、衝撃的な題名ですねとよく言われます。実はこの題名は、荒川区で実際に起きたあるおばあちゃんの自殺事件に関係しています。そのおばあちゃんは生活保護を受けていたのですが、役所からいろいろ言われていました。そしてついに、「福祉は人を生かすのですか殺すのですか。分からなくなりました。私はもう生きてくありません」との遺書を残して死んでいった事件がありました。その遺書をもとにつけました。私自身が非常に衝撃を受けた事件でしたから。

Q. いま出版業界はどうなっているのでしょうか。大分右傾化している本が書店や広告で目立つのですが。

A. とにかく景気が悪く活字離れもあって売れそうな本しか作らないという現実があります。それと右傾化しているというのはその通りで、我々でも議論になっています。

ハイトスピーチなどの右傾化は出版されている本の種類の多さにも現れていますが、大手書店などの売り場での置かれ方も大々的で異常です。ハイト本に比べて、右傾化に批判的な本は書店にあまり並びません。例えば、批判的な本が書店に並び、書店にクレームが入るといいます。特に昨年がひどく、そうしたクレームで自粛してしまう書店がでてきている。これは言論・出版の自由にとって大きな問題です。私のところにもよくドスのきいた怖い声でクレームの電話が来ることがあります。

受賞式である審査員から、「あけび書房は時の政権にケンカを売っていて、いい」というスピーチをいただきましたが、私はケンカを売っているつもりはありません。平和と民主主義、安心な暮らしにケンカを売っているのは安倍さんの方ですよ。穏やかな気持ちを大切に出版していれば、自ずと安倍さんのような人にはケンカを売ることになる時代なのでしょう。だったら、もっとケンカを売らなければ（笑）…。

私達は同じ志を持っている出版社20社程で「平和の棚の会」という会を組織し、平和を追求している本の売り場を作ってくれるよう書店に協同の働きかけをしています。これも右傾化に対抗する一つの活動と思っていますが、出版社と書店の大切な励まし合いでもあります。協力してくれる書店の輪が広がってきています。

Q. 私たちは出版界のそうした動向にどうしたらいいのでしょうか。

A. 一番励みになるのは読者の皆さんから来る手紙、FAX、TEL、メールなどの感想、書評です。特に「いい本出しましたねえ」などと言われると本当に嬉しく力が湧いてきます。愛読書ハガキや手紙、FAXなどで書いていただくのが一番いいと思います。必ず会社の上のほうに届きますから…。勿論TELやメールも有り難いです。

それは出版に限らず、新聞やテレビなどメディアに対しても言えることだと思います。

Q. ところで浦和にすんでお気づきのことはありませんか。また共産党への要望や注文がありましたら何でも言って下さい。

A. 浦和区に住んで 1 年位ですので、まだよくわかりません。これから少しずつおつきあいさせていただけたらと思っています。共産党ですが、今回市議選で当選して本当に良かったと思います。国政でも躍進しています。嬉しいですね。とにかくもっともっと数を増やして欲しい、増やした、それにつきますね。ただ悔しいけれど、いくら頑張っても小選挙区だと厳しいという現実があります。この選挙制度をなんとかしないとダメですね。

Q. いろいろと有難うございました。これからの抱負をお聞かせ下さい。

A. 福祉・貧困、憲法、メディアという三本柱で今後も頑張っていきたい。それと、先程の小選挙区制。この制度をかついだA級戦犯は当時のメディアだと思っています。小選挙区制廃止の本づくりに力を注ぎたいと思っています。

なお、久保社長よりおすすめの本を4冊ほど紹介していただきました。(価格は税別) 注文は直接あけび書房へ TEL (03-3234-2571) 又は FAX (03-3234-2609) でどうぞ。あけび書房ホームページからも注文できます。(以上いずれも送料別途がかかります)。またどの本屋さんからでも注文できます(送料無料)。アマゾンなどのネット注文もOKです。読まれたら是非感想文をお寄せ下さい。

1. 『重大な岐路に立つ日本』世界平和アピール七人委員会・編 (池内了、池辺晋一郎、大石芳野、小沼通二、高原孝生、高村薫、土山秀夫、武者小路公秀・著) 2015/3 刊 1400 円。

湯川秀樹、平塚らいてふさんらが始めた世界平和アピール七人委員会の現委員の著作。

2. 『NHKが危ない！—政府のNHKではなく、国民のためのNHKへ—』
(池田恵理子、戸崎賢二、永田浩三・著) 2014/4 刊 1600 円。

3. 『ヒロシマを生きのびて—被爆医師の戦後史—』(肥田舜太郎、林京子・著)
2004/2 刊 2000 円。浦和区在住肥田先生の本です。

4. 『日本の奨学金はこれでいいのか！—奨学金という名の貧困ビジネス—』奨学金問題対策全国会議・編 (伊東達也、岩重佳治、大内裕和、藤島和也、三宅和久・著) 2013/10 刊 1600 円。